

「三大作曲家の遺言」と

ピアニスト 田崎悦子

「音楽の友」誌上で大絶賛の田崎悦子ピアノリサイタル
ブームス、ベートーヴェン、シューベルトの最晩年の
作品を集めた、関西ではなかなか聴けない全3回シリーズ
「三大作曲家の遺言」第1回が終わって早2ヶ月。
7月の第2回に向けて取り組んでいる
田崎悦子氏にお話を伺いました。

レッスン室の小さなテーブルに積み上げられていたのは、今回のプログラムで
取り上げる3人の作曲家たち：ブームス、ベートーヴェン、シューベルトに關
する英文の伝記や書簡集。どれも辞書のように分厚く、そして年季の入った表紙で
す。「毎晩、少しずつ読み直しているの」と言いながら、まるで幼年期に抱っこし
てもらったひいおじいさんのアルバムをめくるように、ヒゲもじゃブームスの
写真など見せて下さるのでした。
(聞き手・文 岡田真季)

60年代のニューヨークで

「3人とも今生きている人みたいに、とても近く感じるの」。田崎氏が語る背
景には、1960年代ニューヨーク留学時代に受けた、大音楽家たちの影響があ
ります。ホロヴィッツやルービンシュタイン、ゼルキン、ホルシヨフスキなど、
世紀の巨匠ピアニストたちがナチスを逃れてニューヨークに集まっていたのです。
「彼らはその頃70、80代。19世紀末から20世紀の初めころに生まれた人たちで、その
ほんの3代ほど前がベートーヴェンの時代。彼らから発する、強烈な『音楽的匂い』
で、ベートーヴェンが私のおじいちゃんのように感じられたの」

また、シューベルトの作品に
は生前出版されることなく埋も
れたままになり、死後50年ほど
経ってやっと発見されたものが
多くあります。今回のプログラ
ムのシューベルトの3曲もそう
です。田崎氏がいた頃のニュー
ヨークでは、前述のピアニスト
たちがベートーヴェン、ブラー
ムスはもとより、シューベルト



79年シカゴ交響楽団と協演後、
20世紀の大指揮者ゲオルグ・シオルティ氏と

3人の大作曲家との想い出

まず3歳になるかどうかの頃、田崎氏はすでに好奇心旺盛で寝るのも嫌がる子供で
した。彼女がなかなか寝付かないでいると、お母さまが背におぶつて庭に出て、口ず
さむ子守歌がありました。「シューベルトの子守歌よ、と言っていたの。今でもそれを
聴くと、悲しいような、懐かしいような、涙が出てくるような気持ちになるの……」

ブームスの想い出は5歳の頃。まだピアノを習う前に通っていたモダンバレエの
先生が、20歳ぐらいのハンサムな男性ダンサーと一緒に、裸足で熱烈なダンスを踊っ
たのです。「情熱的」という言葉すら知らない幼い田崎氏の感受性に、生涯忘れられな
い衝撃をインプットしたその曲は、ブームスのハンガリー舞曲の5番と後に分かり
ました。「あのリズムとメロディと、あの踊り。その頃から♪パ〜ンパッパ〜パ〜 ティ
〜ラララ〜♪が忘れられなかった!」。そんな5歳の想い出の曲を、田崎氏は今でも生
徒と連弾でアンコールに演奏しています。

ベートーヴェンとの想い出は小学6年生。ベートーヴェンのソナタ「悲愴」を練習
していた頃、あるコンクールに優勝し音楽雑誌の取材を受けました。「何が好き？」と
聞かれると間髪いれずに「ベートーヴェンとお寿司!」と答えたのです。「すごく好き
だったの。あの1楽章の凄さ、パワーと、2楽章の暖かさ……」。そして戦後の貧しい日
本では滅多に食べられなかった、贅沢で忘れられない味、オ・ス・シとベートーヴェ
ンと一緒に語るところに、今の田崎氏に通じるものを感じるのです。「生きること」の
中に『音楽』がとても自然に、そして情熱を持って繋がっている姿。物心つく前から

「三大作曲家の遺言」とピアニスト田崎悦子

の作曲家たちとの想い出は、ニューヨーク時代を経ても確実に彼女の根底に流れている地下水のようなものなかもしれませぬ。

人間としての作曲家たち

さて、ブラームス、ベートーヴェン、シューベルトたちの晩年は三者三様でした。今回のプログラムの作品117（3つの間奏曲）、118（6つの小品）、119（4つの小品）を作曲していた頃のブラームスはあと数年後に迫る死期を意識し、身辺の整理を始め、遺書も書いています。

たった31歳で死を迎えてしまったシューベルトは、その前年に敬愛するベートーヴェンの葬儀に参列し棺を担ぎました。最期の数年間には、今では有名な「ます」、交響曲「未完成」、歌曲集「冬の旅」など膨大な作品を作曲しています。今回演奏される3つの大ソナタに至っては、死の2か月前、ほとんど同時に書きあげました。まるで神が異常な勢いで彼の背中を押ししたように…。

そしてベートーヴェン。田崎氏は「彼は生まれつき苦しみと天才が同居しているような人。天国と地獄にもっとも近い人かもしれない」と言います。「今回のプログラムのベートーヴェンの3作品は」すでに耳がまったく聴こえない頃に作

音楽の友 2014年5月号 Concert Reviews

嶋田邦雄

3月9日 田崎悦子 ピアノリサイタル
「三大作曲家の遺言」関西公演 第1回

ブラームスの「3つの間奏曲」に続いて、ベートーヴェンの「ピアノ・ソナタ第30番」、後半にシューベルトの「ピアノ・ソナタ第19番」を弾いた。限りない優しさの中に哀しみを包み込んだような柔らかい音色と、透徹したダイナミズムが交錯する。強弱やテンポ、間など完璧を感じさせる技巧で、凝縮した視線の中に温もりが輝くブラームスや、情熱を沈潜、抒情へと昇華させるベートーヴェン、悲嘆と憧憬や幸福感が緋い交ぜになった世界に浮き彫りされるシューベルトを描き出したが、それ以上に聴衆を魅了したのは作曲者への深い想いを感じさせる演奏だ。緻密でありながら自由に飛翔する打鍵を通して、聴衆と作曲者をつなぐ活き活きとした回路が創り出されていた。「三大作曲家の遺言」のタイトルで企画された3回シリーズの初回。どの曲も限りない深みを背負う最後期の作品だが、それらと新鮮な充足感で向き合えるのは楽しい。期待したい企画である。

曲されています。このため、楽器としてのピアノの制約や限界から離れてほとんど『音楽そのもの』を追求するようになっていった。彼独特の地平線と天国の狭間に入っているような、我々には想像できない世界にいたのではないのでしょうか」

今日も田崎氏は、音楽家として楽譜やピアノに向き合いながら、同時に人間としての彼らを知ろうと努めています。「本と楽譜を裏から、表から見て、読んで、感じ取るうとして彼らに近づくの。どういう恋愛をして、どんなものを食べて、どんな格好をして…とか」。そうするうちに、彼らはもう過去の歴史に留まっている作曲家たちではなく、今現在彼女と同居し、寝起きを共にしている生身の『人間』に他ならない存在となるのでしょうか。インタビュを終えて、次の言葉が演奏家・田崎悦子を最も鮮やかに表わしているように思います。

「この3人の作曲家たちは非凡な感受性と才能を持った人々です。時代も国も乗り越えて、一人の人間として彼らが皆さまのリビングに招かれて、皆さまと一緒に食べ、飲み、語らえるように、私は彼らと皆さまを仲介する『黒子』のような存在でありたい、と日ごろから願って止みません」

第2回は7月13日(日) 13時30分開演 大阪 ザ・フェニックスホールにて。ぜひお聴き逃しのないように！



「三大作曲家の遺言」第2回 プログラム

- ・ブラームス/6つの小品 作品118
- ・ベートーヴェン/ピアノソナタ31番 作品110
- ・シューベルト/ピアノソナタ20番 遺作D. 959

※第3回 2014年11月23日(日)

13時30分開演

◆ チケットお申込み ◆

- ・チケットぴあ Tel. 0570-02-9999
全公演共通Pコード 212-450
※セブン・イレブン、サークルKサンクスでも購入可
- ・ザ・フェニックスホールチケットセンター
Tel. 06-6363-7999
※土日祝を除く平日の10時～17時
- ・ピティナかつらぎステーション
Tel. 075-621-6339